発　刊　に　よ　せ　て

新潟県知事　　泉田　裕彦

子育て家庭を地域や社会へ繋ぐための果たすべき役割や、虐待予防等を考えるため開催しました「第 11 回全国子育てひろば実践交流セミナー in にいがた」が、全国から延べ約 1,000 名の参加者を得て成功裡に終了しましたことを大変よろこばしく思いますとともに、開催にご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

本セミナーでは、「子育てのときを実り豊かに～大きく育て　ひろばの新たな 10 年～」をテーマに、基調講演やシンポジウム等による全体会と６つの分科会を行いました。

全体会では、各分野から講師をお迎えし、子育て支援に関わる知見を深めていただくとともに、分科会では、活発な意見交換により、今後の子育て支援活動の充実に向けて、多くの示唆と成果を得ていただけたものと確信しております。

ご参加の皆様には、本セミナーを通して広域・多岐にわたる支援者ネットワークの構築や支援ノウハウの共有、支援者同士の交流等を図っていただけたものと思います。本セミナーにより得られた貴重な体験や情報を日常の活動に活かされ、今後、益々活躍されることをご期待申し上げます。

終わりに、開催にあたり本セミナーの趣旨にご理解を賜りご支援いただきました関係機関、団体の皆様に対し、改めて深く感謝の意を表すとともに、この報告書が地域における子育て支援活動を更に充実したものとする上での貴重な資料として、幅広く活用されることを希望し、発刊によせる挨拶といたします。

11/10(土)日 12:45受付開始

会場：上越教育大学講堂

子育てを支える仕組みが大きく変わろうとしている今、どのようなひろばのあり方が望ましいのでしょう。子育て家庭の「ひろばへの一歩」を、地域や社会へとつなぐために果たすべき役割は何でしょう。皆で考えてみませんか。

13:30~13:50 **開会・挨拶**

13:50~14:20 **行政説明** 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室長 黒田 秀郎さん

14:20~15:20 **基調講演**

社会が支える 子育てのとき
~子どもと家庭をめぐる現状、これからの課題とひろば~

講師 慶應義塾大学病院 外来医長 渡辺 久子さん
コーディネーター 日本福祉大学 子ども発達学部教授 渡辺顕一郎さん

15:30~17:00 **シンポジウム**

大きく育て ひろばの新たな10年

コーディネーター 日本福祉大学 子ども発達学部教授 渡辺顕一郎さん
シンポジスト 慶應義塾大学病院 外来医長 渡辺 久子さん
NPO法人マミーズ・ネット 理事長 中條美奈子さん
上越市健康福祉部長 野澤 朗さん
厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室長 黒田 秀郎さん

交流会
19:00~20:30
会場：デュオ・セレッソ
※会場の詳しい案内図は裏面に記載
交流会費 1人 5,000円

11/11(日)日

9:30受付開始
10:00~12:00 分科会
12:00~13:00 昼休憩
13:00~15:15 全体会

会場：上越教育大学

第1分科会 原点確認！子育て支援基本の「き」

ひ ひ ひ ひ 保 児 サ 研 多

地域子育て支援拠点事業ガイドラインをもとに、「ひろば」でのプログラムについて考えあいます。大切にしたいことをもう一度確認してみませんか?

講師 長野県短期大学 講師 金山美和子さん
コメンテーター 福岡女学院大学 准教授 若山 哲さん
事例発表者 上田市中央子育て支援センター 統括主査 柳澤 理栄さん
NPO法人せたがや子育てネット 代表理事 松田 妙子さん

第2分科会 「ひろば」への一歩を地域や社会への一歩に

ひ ひ ひ 保 児 サ 多

利用者の生活の背景を理解し、地域とつないでいこうとするとき、支援者に必要とされる視点は?具体的な手法は?

講師 日本福祉大学 教授 渡辺顕一郎さん
事例発表者 NPO法人ふらっとスペース金剛 代表理事 岡本 聡子さん
NPO法人くすくす 理事長 安田 典子さん
社会福祉法人喜育園山東保育園 園長 村上 千幸さん

迷った時のおすすめマークをつけています
ひ ひろば・センタースタッフ ひ 初任者 ひ 中堅者 ひ 施設長 ひ ボランティア ／ 保 保
母 母子保健・医療関係者 ／ 行 行政関係者 ／ 研 研究者・学生 ／ 多 多様な運営主

ひろば…地域子育て支援拠点事業、親子の居場所づくり活動の総称として表記しています。

第3分科会 減災の視点でみる「ひろば」

ひ ひ ひ 保 児 サ 多

地域子育て支援拠点が乳幼児の子育て家庭の安心のために果たす役割や、避難親子への対応などについて考えます。

助言者	新潟大学大学院　教授	佐山　光子さん
コーディネーター	NPO法人やまがた育児サークルランド　代表	野口比呂美さん
事例発表者	NPO法人多世代交流館になニーナ　代表理事	佐竹　直子さん
	仙台市子育てふれあいプラザのびすく泉中央　副館長	小川　ゆみさん

第4分科会 「ひろば」がになう虐待予防の役割

ひ ひ 民 母 行

地域子育て支援拠点が、親を支援し、虐待予防に対して果たす役割について考えていきます。

コーディネーター	関西学院大学 准教授	橋本　真紀さん
コメンテーター	真生会富山病院　心療内科部長	明橋　大二さん
事例発表者	NPO法人ゆめきゃんばす　副代表理事	児玉久美子さん
	聖ルカ保育園地域子育て支援センターおひさま　園長	清河　直美さん

第5分科会 「ひろば」のこれからの10年を大いに語ろう！

ひ 保 児 サ 研 多

今後の「ひろば」のあり方をどうしていくべきか、10年先を見据えて語りましょう。

講師	関西大学　教授	山縣　文治さん
助言者	白梅学園大学・同短期大学長	汐見　稔幸さん
コーディネーター	NPO法人子育てひろば全国連絡協議会　理事長	奥山千鶴子さん
事例発表者	NPO法人ヒューマン・エイド22　代表	椎谷　照美さん
	NPO法人アンジュ・ママン　施設長	小川　由美さん

11月10日（土）午前中にも施設見学のみできます

- 上越市ファミリーヘルプ保育園　定員あり
- こどもセンター　定員あり
- わたぼうし病児保育室　要申込み

希望される方は電話にてNPO法人マミーズ・ネットまでお申込みください。

第6分科会 施設見学とワークショップ

9:40～（20分早く開始）

ひ ひ 民 母 行 研

ファミリーヘルプ保育園（24時間保育園）・こどもセンター・わたぼうし病児保育室を見学後、地域ニーズに応える「ひろば」について考えあいます。

開始時間が他の分科会とは異なります

コーディネーター	上越教育大学　准教授	杉浦　英樹さん
コメンテーター	社会福祉法人雲柱社　施設長	新澤　拓治さん
	NPO法人新座子育てネットワーク　代表理事	坂本　純子さん
現地説明者	塚田こども医院院長・わたぼうし病児保育室	塚田　次郎さん
	上越市こども課	
	NPO法人マミーズ・ネット	

全体会 実り豊かな子育てのときを　ひろばで支える

13:00～14:00 **講演**

講師　白梅学園大学・同短期大学長　汐見　稔幸さん

14:00～15:15 **パネルディスカッション**

コーディネーター	NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長	奥山千鶴子さん
パネリスト	白梅学園大学・同短期大学長	汐見　稔幸さん
	長野県短期大学　講師	金山美和子さん
	社会福祉法人雲柱社　施設長	新澤　拓治さん

保育所・幼稚園関係者　／ 児 児童館・児童センター　／ サ サークル運営者・子育て支援グループ　／ 民 民生児童委員・主任児童委員
主体（NPO・大学・生協・福祉施設・病院・企業・商工関係者ほか）

行政説明　新たな子育て支援拠点へ

上越教育大学講堂

厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室室長　　黒田　秀郎さん

今までの子育て支援の発展をベースに、今年の８月に子ども・子育ての仕組みを改正する子ども・子育て関連３法が国会で成立した。平成２７年度の施行を予定している。今後は皆さんが携わっている子育て支援の環境もかなり姿を変えていくことになる。この仕組みでどうなるのか（当日資料Ｐ16～21 参照）。現在は所轄官庁（厚労省・文科省）、実施主体（都道府県・市町村）、実施要件（20人の壁）という３つの壁があるのが幼稚園、保育所、認定こども園の問題となっている。今後は今まで別々の法律で行われている分野を、財政支援を束ねて新しい法律を与える。子ども・子育て支援給付という仕組みを作って、子ども・子育て支援法という新しい法律をたて、財政支援は厚労省・文科省から内閣府に一本化される。すなわち厚労省・文科省の二重行政は解消される。また、現在は子育て支援の分野も、色々な仕組みに分かれて運営をされている。それを今回の仕組みでは、新しい法律の共通メニューとして、地域子ども・子育て支援事業という新しい仕組みをたて、市町村でお願いをしようということにしている。

また、内閣府には子ども・子育て会議という会議を作る。この会議は子ども専用だということ。これまで、厚労省は社会保障審議会、文科省は中央教育審議会と別々の場で議論されていたことを、就学前の子どもを中心とした子育て支援の当事者や子育て中の方にも参画をいただいた新しい会議を平成 25 年 4 月に作る。また、この会議体は都道府県や市町村にも設置をするように努力をするということが法律に明記されている。ぜひ、子育て支援に関わる方、子育て中の方にはこれからできてくる会議体に参加をして頂き、都道府県や市町村が作る計画の中に声を反映させていただきたい。

新しい法律に基づいて出てくる子育て支援の施策の中で、どれを選んだらよいのか、親御さんの水先案内人として子育て支援の場所で「利用者支援」をして頂きたい。

利用者支援がどのような形になるかはこれからの議論に委ねられるが、ぜひ、地域子育て支援拠点を実施する皆さんにも考えていただきたい。

今後は地域子育て支援拠点が地域の方々と連携をし、地域の方々を呼び込み、また、みなさんが地域に出ていく仕組み（地域機能強化型）の創設を目指して行きたいと思う。

基調講演　社会が支える　子育てのとき ～子どもと家庭をめぐる現状、これからの課題とひろば～

上越教育大学講堂

『いのち』の原点と他者との関係性、胎児期・乳幼児期・思春期の脳の発達、自己肯定感を育むためにはどうすればよいのか。子育て環境を取巻く現状や、あるべき姿を学びました。

●講師　慶應義塾大学病院外来医長　　渡辺 久子 さん
●コーディネーター　日本福祉大学教授　渡辺顕一郎さん

渡辺顕一郎　1995 年に地域子育て支援拠点事業として始まり、現在、子育て支援拠点が全国で約5,700ヶ所、現在に至るまで急速に伸びている。なぜ必要とされているのか考えたい。人間の長い歴史の中では親族や地域の中で子育てが行われてきた。しかし、現在ではその役割が崩れ、家庭の役割・責任が大きくなっている。子育て家庭が置かれている状況、子どもの育ちをめぐる課題を渡辺久子さんにお話しいただく。

渡辺久子　ひろばがあるところに文化が育つ。子育ての最も大事な部分である、「いのち」。幸せな「いのち」だと感じることこそ関係性の原点である。お母さんに育児のすべてを委ねるという発想は全くないが、母親の存在がどれだけ大事かという事を子どもたちに教えられている。ジャン・ジャックルソー「エミール」の言葉に「わんぱくを育てなければ良い大人はつくれない」とある。以前、私たちが地域のお母さんたちと一緒に文庫を作ったとき、本当に驚いた。厳しくしつけられたお行儀のよい子ほど文庫での裏表が激しい。もっと驚いたことは、子どもは私ににっこりしながら入ってくるのに、後ろから来た母親は大声で「ご挨拶は！」と怒鳴り、私に会釈もしない。このあべこべの日本の中で子どもは育たないと仮説を立てたのだ。

子育てひろばでやらなければならないのは「いのち」の原点である、まだ言葉の喋れない子どもでも「生きた」という体験をさせる、一人ひとりの心の「芯」を温かくできるかどうかということ。

ギリシャ人は畏くも時には 2 種類があると言った。一つはビジネスの時間クロノスという時。これは1日が24時間。しかし、日本はクロノスを磨きすぎたばかりにもう一つの時を失ってしまった。喜怒哀楽の本音の時、カイロス。これは主観の時間であって、誰も他人の時間は分からないし、想像するしかない。というわけで、私が分かってきたことは、一人の人の気持ちというのは絶対にわからないということ。ましてや物言えぬ小さき幼子の気持ちなどわかるわけがない。

ダニエル・スターンは言った。「『いのち』として生きた瞬間の身体感覚記憶が心の原点」。母親の精神状態を赤ちゃんは敏感に察知し影響を受ける。胎内で知っている安心な世界は 24 時間自分を受け止めてくれる母のような羊水に抱かれた世界。それは父のような子宮が羊水と胎児を守りぬいているからである。「いのち」としてまごころをこめて守りぬかれる時、子どもは厳しさもまたひたむきな愛情であることがわかる。

生まれて間もない赤ちゃんは母親の瞳の奥に一つの関係性を見出す。母親がにっこりしていると乳児は、自分が温かい視線を投げかけてもらえる存在だということを感じ取る。自分の自己像が作られる。ここから心作りが始まっている。

１歳半は負けるが勝ち。１歳半の脳は自我が芽生える。胎児期は命として生まれ、乳幼児期は心として生まれ、思春期は自己同一性、自分らしい自分を見つける時期。私たちが心掛けたいのは、どんな環境でも自らを失わない温かいハートを持っている、自分を好きであり続ける子どもに育てること。１歳半は、Ａ(危ない)Ｋ(汚い)Ｕ(うるさい)だ。子どものＡＫＵをおおらかに受け止める社会を作ることが必要なのだ。

シンポジウム　大きく育て　ひろばの新たな 10 年

地域子育て支援拠点事業のこれからの１０年を見据え、「ひろば」の担う役割・課題について考え合いました。シンポジストからは実践者、行政の立場から、それぞれ熱いメッセージを頂きました。

●コーディネーター
日本福祉大学教授　渡辺顕一郎さん
●シンポジスト
慶應義塾大学病院外来医長　渡辺　久子さん
ＮＰＯ法人マミーズ・ネット理事長　中條美奈子さん
上越市健康福祉部長　野澤　朗さん
厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課
少子化対策企画室室長　黒田　秀郎さん

渡辺顕　日本は子育ての負担が母に偏りがち。先進国の中で女性の社会参画は最低といってよい。保守的な性別役割分業が根強く残っている。０歳から３歳の子どもたちの７割が母親と家庭で過ごしている、子育てしている家庭が孤立化している姿がデータからも浮かび上がる。子どもたちも社会と接点を持てずにいる。地域子育て支援拠点は子どもの発達を支える場であり、いろいろな形の拠点がある。児童福祉法の中にも位置付けられている。拠点では何をしていくのか？明日の第一分科会で確認していくのだが、厚生労働省が告示している実施要綱の中に ４ つの取り組みが書かれている。実践の中から取り組みが生まれ定められたものだ。これを基本として実践が行われている。それではまず、二人のシンポジストから実践報告をお願いしたい。

中條　マミーズ･ネットは、1996 年に育児サークルの連絡会として活動を始めた。一年の半分が雨や雪で外では遊べないという気候の土地柄で少子化が進み公園に行っても他の親子に出会えない、そんな環境の中で、親子が仲間に出会える場がほしいと考えて活動を続けた。今は自営の子育て応援ひろば「ふぅ」を開設し上越市のこどもセンターの運営を受託している。地方都市でも自治体や企業とＮＰＯがうまくいっている例としてよく言われ、なぜなのか不思議がられるが、活動当初から男女共同参画の視点をもったことが良かったのではないかと思う。子育ての問題を社会の仕組みという広い視点から考えることができた。そして行政にも市民活動を応援する仕組みがあった。

私が子育てを始めた時、待ち望んで母になったのにとても生きづらかった。子育て環境をより良いものにしたいと活動を続けてきたが、ひろばで見聞きする状況からみて母親に育児負担が偏っていることに変化はない。その上、母親の孤立感は深まっているように思う。ママ友から仲間はずれにならないように気を使い我が子が何かしでかさないように先に回って気を使う。子育てを当事者同士が助け合い支えあうことが難しくなってきている。親子が集まり交流することは大切だ。ひろばに来ている人は大丈夫と言われることもあるが、一見幸せそうで問題がなさそうな人が深い悩みや大きなトラブルを抱えていたりもする。ひろばは、隠れたニーズに気がついていける場でもある。良い子育てを教えるだけの支援に終始するのではなく、充実した子育て期を過ごせるように、親子の生き方そのものを支援していく視点を持ちたいと思い活動している。

野澤　「子育てするなら上越市」と言われていた時は、同時期に市民活動に力を入れている時だった。ＮＰＯの新潟県内認証第 1 号、第 2 号は上越市。まちづくりの基本がその時期にあったと思う。私は子育て支援の前に子どもの育ち支援ではないかと思っている。子育て支援というと、母親の支援と考えがちだが、子どもの育ちを考えると、子どもが自分で育っていくことを選択できる、そういう視点の支援が必要なのではないかと思っている。現在は、行政サービスの転換期だと感じている。縦割り行政が言われるが、私どもはできるだけ縦割りにしないことを徹底している。市役所とは困った人を助ける場所。生きづらく感じている人をいかに生きやすく支援していくか、しかし極めて生きづらくなってから福祉制度を与えても遅い。私が感じるのは「制度」が人を支えるのではなく、「人」が人を支えるのではないかと感じている。子どもの育ちの中で「ひろば」

は、すばらしい役割を担っている。

今年４月にスタートした「すこやかなくらし支援室」では福祉を総合的にとらえ、市役所が組織として個別の家庭をケアしていく。その中に親子の支援があり、その一つとして、子育てひろばがあると捉えている。これからの行政では困っている人を見つける「センス」、出かけて行って話を「聴く力」、支援していく「目」が必要。縦割りの組織ではなく、各家庭を長期的に見ていかないといけないと考えている。

渡辺顕　なぜ子育て支援が必要なのか、これからどのような支援が大切になってくるのか。統計では昨年度の児童相談所への虐待報告は 55,000 件。現在は早期発見、再発防止への取組みに力を入れているが、一番大事なのは虐待の発生予防。明日の第４分科会は「ひろばがになう虐待予防の役割」がテーマ。予防的な支援について厚生労働省の取組みについてお話しいただきたい。

黒田　虐待をされているのをどこで発見するのか？未就園の子どもたちにとっては地域子育て支援拠点が良い場所である。また、乳幼児全戸訪問も親子の問題を発見するのに期待される。乳幼児全戸訪問の際、地域子育て支援拠点を勧めていくことも有効。虐待問題の点では地域子育て支援拠点に来られない親子ほど問題は深刻である。乳幼児全戸訪問の際、地域子育て支援拠点スタッフが同行することで、顔見知りになり、親子が地域子育て支援拠点へ出向く心理的な負担が下がるケースもある。いくつかの事業を組み合わせていくことが今後も求められる。

渡辺顕　親が深刻な悩みを持っている時どうすれば？

渡辺久　集団が密室になると虐待が発生しやすい。性被害も同様。発生を予防したければ、失敗を許しあう家庭・職場をつくらなければならない。相手と関わった時のネガティブな感情を振り返り見つめることをしないと関係性において密室になってしまう。ひろばにおいて虐待をしているかもしれない人に会ったとき、一生懸命子育てをしている結果、虐待をしているのかもしれない、という視点も持たなければならない。『つるの恩返し』に例えると、鶴は羽の抜けおちた自分の姿を見られた時に、「私はあの時の鶴だったんですよ」と言えば良かったのに、見られることは承知の上だったのに、いざ見られると「見ましたね」と自分から相手との良いコミュニケーションを絶ってしまう。つまり、例えば虐待をしている母親が告白をしてきたときに、その人の本音を知ろうとし、よくぞ私を信頼しご自分をさらけ出してくださいましたとねぎらわなければならない。ところがこちらが不安でコミュニケーションをこわしてしまうのかもしれない。

私は虐待を告白してきたお母さんに対して、だれがそこまで追い詰めたのかを考える。理想的な育児を周りが言えば言うほど虐待は起こりやすい。虐待を疑われる人のプライドこそ大事にしなければならない。欧米の虐待予防の真似事ではなく、日本人は日本人の話を聞かなくてはいけない。「いいかげん（良い加減）」の視点を広げていきたい。

渡辺顕　第２分科会はアウトリーチ。支援が必要な人ほど自分からは出ていかない。ひろばの機能拡充について。第３分科会は減災の視点でみる「ひろば」。福島県からの避難者の受入れは山形県が最も多く実践例を学ぶ。震災後、放射能汚染など母親の不安感が子どもに伝わっている。母親の不安は子に影響を与える。子どもの問題は親に影響を与える。子育て支援は親子両方のためのものだ。皆さんからのコメントをいただいて明日の分科会につなぎたい。

中條　子どもの数が減り、身近に子どもがいなくなってしまい「生身」の子どもを知る人が少なくなってしまった。子育て全般で親が責められがちであり、親も責任を背負い込み孤立してしまう。そんな中で、ひろばが果たす役割の可能性は大きいと思う。地域のニーズに合わせて、親子の思いを拾い、地域に必要とされる場であり続けたい。「いい加減」で良い時間を親子で過ごすことができる、親子にとって居心地のいい場になっていってほしい。

野澤　家族ぐるみで支援しなければならないと感じたことは、被災者支援から学んだ。今も支援は続いている。専門家ができること、市民レベルでもできることを見極め、幅広くいろんな家庭があることに気付くことが大事。制度ではなく人こそが支援をしていく上で重要なのだ。すなわち、子育てひろばの意味はそこにあるのではないかと思う。

黒田　もし、ひろばをやり始める時に、財源がないと言われたら、消費税から国・地方に７千億円割り当てられると言ってほしい。もし人材がないといわれた時は私がやると言ってほしい。行政側にとってもひろばは感謝され、やりがいのある政策だと感じてもらえるはずだ。

渡辺久　子育て支援とは子どもと親と地域の関係性のことなのだ。怯えの中で幸せは作れない、怯えは怯えとして受け入れ、自分は自分で良いと受け入れること、ひろばで伝えていくことが大事。スターンの言葉に「人間はみな多重人格だ。組んだ相手によって引き出される自分が全部違う」。だから良い人と組もう。

渡辺顕　４人の方から熱いメッセージをいただきありがとうございました。今日の学びを生かし、明日の分科会ではさらに学びを深めていただけたらと思う。

第１分科会　原点確認！子育て支援基本の「き」

講義棟２０１教室　　参加者 98 人

地域子育て支援拠点事業ガイドラインをもとに、「ひろば」の機能や支援者の役割を確認しました。更に基本を大切にした実践事例からプログラムのあり方についても考えあいました。

●講師
長野県短期大学専任講師　　金山美和子さん
●コメンテーター
福岡女学院大学准教授　　若山　哲さん
●事例発表
上田市中央子育て支援センター統括主査　　柳澤　理栄さん
NPO 法人せたがや子育てネット代表理事　　松田　妙子さん

＜講師より＞

「ひろば」の機能と支援者の役割

金山美和子さん

平成 29 年の目標値が 10,000 カ所とあるように今後も地域子育て支援拠点の設置箇所数は増加する予定である。量的な拡大と共に支援の質の確保が今後の重要な課題である。しかし現場からは、「具体的に何をどうすればよいのか迷っている」「前任者から引き継いだことを行っているがこれでいいのか分からない」という支援者の声も少なくない。

地域子育て支援拠点事業ガイドラインにおいては、拠点は、子ども同士、親同士、さらには地域の様々な人たちと子育て家庭をつなぐ「架け橋」としての働きが期待されていると記されている。また、支援者の役割としては、温かく迎え入れる、身近な相談相手であること、利用者同士をつなぐ、利用者と地域をつなぐ、支援者が積極的に地域に出向くことなどが大切である。

つぎに、センター型、ひろば型の二つの事例報告から「ひろば」支援の基本を大切にした実践について考えたい。

＜事例報告＞

利用者とひろば、地域をつなげる

柳澤理栄さん

上田市中央子育て支援センター（センター型）は複合施設内にあり、健康推進課・保育課・発達相談センターも併設しているため健診のついでに遊ぶ、遊んだついでに専門職による相談ができる利点もある。

【事例　外国からきたママたち】

外国籍の利用者が「たまには母国語で思う存分話したい」とスタッフに打ち明けた。スタッフはその時に同じ国の方に伝えてもいいか確認をし、その後その２人を紹介し母国語で思う存分おしゃべりができた。スタッフが利用者同士をつなぐこともしているが、利用者も震災で避難している方にひろばを紹介するなど利用者間でもつながる場面も見受けられる。

地域とつなげる役割として子育てサポーターの養成を行い、サポーターの住んでいる地域の子育て広場や子育てサークルで活動している。他に地域に出向く活動として「おひさまセンター」を開催。週に１回天気の良い日に地域の公園に出向き、ひろばに来るのが苦手という方と交流している。またスタッフが地域の方と交流できるよい機会になっている。

＜事例報告＞

地域の中の子育てシーンを作り出す

松田妙子さん

毎年 7,000 人を超える赤ちゃんが誕生している世田谷区で、地域の中の子育て支援をどうやって作っていくかを模索しながら拠点事業の「アミーゴ」と団地の中にある「せたがや子育てネット」の２か所のひろばを運営している。

アミーゴでは近年できなくなっている「泥んこあそび、とりあいをする、親は見守る」こんなシーンを増やそうと活動している。親同士の信頼がないとできないことだが、ひろばでこんなシーンができると見ていた保護者が次につながってくる。利用者の中には自分の子を他の利用者に抱っこしてもらうのをいけないことだと思っている方もいる。「すみません」ではなく「ありがとう」になるように、緊張がほぐれた子育てをしてほしい。

もう一つのひろば、せたがや子育てネットでは「団地の中に立ち話を増やそう！」を目標にしている。

【事例　ひろばでおもちゃの修理】

普段子どもが来る所だからと大人は入って来ないが、外から見える所で地域のおじさんがおもちゃや傘の修理をすると、地域の人が入って来てくれひろばを理解してくれた。

【事例　ハロウィン】

団地の中の心配なお年寄りを自治会長さんに聞き、お菓子を子どもたちに渡してもらうようお願いした。子どもたちがお年寄りの家を訪問しお菓子をもらい地域の方と交流した。竹とんぼを用意してくれたお年寄りも。

活動を広げ、ひろば以外でも立ち話が増えてきた。

＜コメンテーター＞

ひろばのプログラムの在り方について

若山　哲さん

ひろばでもプログラムを組むときにどのような対象者に向けてするのか明確なイメージをもって取り組むことが大切である。留意すべき点は子どもの面白い・楽しいは年齢によってどんどん変わってくため、その年齢では何が楽しいのかを考えること。そして制作を行う際は題材設定（どんなものを作るか）や関わり（どういう結果を求めるか）によって作り手の体験内容や感覚が大きく変化することを知っておいてほしい。また支援者として、一緒に制作をしている保護者はどのように思っているかを汲み取ることが大事である。「今できなくてもできるようになる・・・」と思えない保護者に対して気を付けてほしい。

最後に他のひろばのプログラムをそのまま持ってくるのではなく、大事なのはどのようなプロセスを持って活動していくのか。また利用者がどのように関わっていくのかによって意欲的なものにもなるし無理やりやらされているという活動になってしまう危険性もある。

明確なイメージを持つこと。そして、いろんな人の「居心地がいい」があるので、それぞれにある程度対応できることを考えていけるとよい。

＜質疑応答＞

〇子育てサポーターの養成講座について詳しいことを教えてほしい。

（柳澤）年に１回　講師、助産師、臨床発達心理士を招いて養成講座を行っている（内容は座学４回・実践１回）。詳しくは文部科学省ＨＰ家庭教育支援連携事例の参考集を参照。

〇保育園と併設の支援センターで園と孤立していて連携がとれていない。他の拠点はどのようにしているのかを知りたい。

（柳澤）行政でそれぞれ課が違うため年に一回市役所で話し合い、質問・思いを共有している。日々の話し合いは同じ施設内に連携する課があるため密に連絡をとりあっている。

〇他の打開策は？

（柳澤）致命的な失敗はしないようにしながら小さな失敗を重ね、その失敗をスタッフ同士で共有しながら今日がある。立場や役割を超えて「どんなひろばにしたいか」たくさん聞いたり話したり、コミュニケーションを取り合うことが大切だと思う。

＜まとめ＞

これまでの 10 年間の実践をまとめたガイドラインを基本に経験を積み上げてゆく。（金山）

一人一人のエピソードを大切に。その背景や地域の姿を見つけて地域の中の拠点に。（松田）

いつも利用者さんのことを考えながら。（柳澤）

いろんなひろばがあっていいんだよ・・・このスタンスからスタートする。（若山）

基本の「き」

失敗を重ねてくることで見えてくる

失敗を恐れない！！！

第2分科会　「ひろば」への一歩を地域や社会への一歩に

人文棟 113 教室　　参加者 65 人

子育ての背景にある問題を考え、ひろば利用者を地域社会へつないでいくために必要な視点について、3 団体の事例を聞きました。その後、グループワークを通じて、課題や必要な支援についての意見交換を行いました。

●講師

日本福祉大学教授　　渡辺顕一郎さん

●事例発表者

NPO 法人ふらっとスペース金剛　　岡本　聡子さん

ＮＰＯ法人くすくす理事長　　安田　典子さん

社会福祉法人喜育園山東保育園園長　　村上　千幸さん

＜講師による趣旨説明と導入＞

つながりを作り直していく役割

渡辺顕一郎さん

現在、様々な地域子育て支援拠点ができてきている。これほどまでに必要とされるのは、地域での子育てが難しくなってきたことが背景にある。

ひろばには、つながりを求めて来ている。利用者同士のつながり、地域とのつながり、アウトリーチが求められている。このようなつながりを作り直していくのが拠点の役割といえる。

＜事例報告＞

ひろばから社会へとつなぐエンパワメントの関わり

岡本聡子さん

自らの困っていることが出発点となり、しんどい子育ての中でホッと一息ついてお茶を飲める場所をと、8年前ニュータウン内の民家を借りて自主運営で「ほっとスペース」を始める。活動の中で様々な困っている人がいることがわかってきた。出張ひろば、一緒に子育てヘルパー、預かり保育、同行支援など、ひろば事業でどこまで関わっていけるのか悩みながらも、多様化するニーズに答えるよう、母親に寄り添い様々な活動へと広がってきた。

地域の保育園との交流や学生リーダーと小学生の休日活動など、地域とひろばを繋げるような活動を展開。「ママ咲く講座」では、得意なことを登録してもらい、それを生かせる場作りをスタッフが応援。今、支援されている人が、誰かを支援する側にまわることもあると信じている。

しんどい子育てが虐待に繋がらないようにと、子どもと少し離れてリフレッシュすることや、仲間と繋がるような企画をしたり、ママ自身が自信をつけるような工夫をすることも、ひろばの役割と思う。また、講座等を工夫することで、ママたちのエンパワメントにつながり、社会に出たときの仕事につながるとも考えている。ひろばでのそのような経験が、いずれPTAの役員になったり、地域の中で何か活躍することにつながっていると感じている。

ひろばの中だけでいるのではなく、地域との関わりをもてるような企画やきっかけ作りを考えながら、活動を広げている。

＜事例報告＞

ひろばは擬似地域

安田典子さん

くすくすは男女共同参画の視点からの子育て支援活動をしている団体。子どもを産んだその瞬間から、世話役割、家族の関係維持・心理的ケア、良妻賢母などの様々な役割を求められ、母親は見えない「あるべき母親像」に怯えながら子育てをしている。自分を犠牲にしながら不安定でしんどい子育てをしている中で、大切に育てているはずの子どもたちの育ちがおかしいことに気づく。「あの人は～だから」「女だから～」と扱われてきた中で、「あの人は別」「自分とは違う」と「べつ意識」を持ち、問題を問題としてとらえず、

しきりをつくり自分をも閉ざしてしまっている。子どもたちにも影響しているのではないか。母親に自信がないから子どもにも自尊心がなくなってきていると感じる。私たちの発言そのものが社会を形成している。気持ちを押さえ込まず相手に伝えることが大事。想いを言葉にすれば自分が変わる、その言葉を形にすれば社会が変わる。

拠点は擬似地域。子育てを通じた地域のコミュニティと捉えている。スタッフやママたちの発言・行動が地域社会をつくっている。母親たちがお客さまではなく主体的に人と関わっていく仕組みを作ることが大事。子育て期に沢山の人と出会い、いろんな考えを知ることが、考えや生き方を見直したり、変えるチャンスでもある。不安定だが可能性があるこの時期を、拠点が担っている。

スタッフは利用者のニーズを先取りして動くのではなく、必ず意思確認をして接している。「人間の尊厳」を大事にしない支援は必要ない。そこを大事にしてくれる人が求められている。スタッフ自身が「ひとりのロールモデル」として試行錯誤し、成長していくことを見せていくことが、社会への一歩になると考えている。

＜事例報告＞

元気な人をより元気にする地域づくり

村上千幸さん

平成7年から保育園での支援センターを始め、居場所作り、情報提供、相談事業等してきた。しかし、子どもたちの5年後、10年後は、ますます悪くなる様に感じる。目の前の子育ての不安をなくすという対処療法と同時に、暮らしの不安をなくしていくことが大事と考えた。元気な人たちをもっと元気にと、平成13年に「子育て応援団」という地域を元気にしていこうという団体を作った。子どもの育つ環境をいい環境にしていく取り組みを始めた。

お母さんのストレスの大きな部分が食事とわかり、地域に畑を借り大豆、小麦、味噌作りなどを体験することによって暮らしに自信をつけてきた。元気な人がもっと元気になっていけば、不安をもった人達も引き込まれていき、地域全体がトータルに元気になっていく。母親が自信をつけて元気になっていくと、子どもも自然と元気になる。

個人の持つ様々な役割を変えていくこと、支援を受ける人が社会の中での役割を変えていき、つないでいくことで、交流ができる。マスメディアの情報はある目的を持った情報でしかない、子育てにはお金にならない情報が重要であり、そんな情報を出し合える地域であることが必要。自分たちも地域の一員であることを忘れず、自分たちの組織の立ち位置も考え、経済に乗らず、本当に子どもたちにとって必要なこと、大事なことを考えること、多機能型に積極的意識を持っていくことが大切と考えている。

グループワーク
①子育てをめぐる問題
②支援の対象は？
③どのような支援が必要か
④どこが支援を担うのか
について、ポストイットに書き込み、グループ内での話し合いを行った。

講師より、「いろんな立場の方々が集まっているこのような機会がとても大切。地域というまとまりの中で、誰に対してどんなことが必要で、お互いがどんな連携をして協力していけるのか、という地域の支援のあり方を、立場を超えてこのように話し合う機会が必要とわかってもらうために、ワークを行った」とのコメントを頂いた。

＜講師のまとめ＞

今の親はダメになったのか、ということを考えてみてほしい。虐待は増えているのか？子どもの虐待死が一番多かったのは、1970年代（警察庁犯罪統計書より）。その後虐待に関心がもたれるようになり、通告義務ができた。虐待件数の増加は通告する人が増えただけなのかもしれない。「今の親は…」という世間の目が、より今の子育てを窮屈にしている。

先輩には二つのタイプがあり、一つは自分たちだって頑張って我慢したのだからお前たちも頑張れという先輩、自分たちはしんどかったんだから次の世代には引き継がない、負の連鎖は断ち切る先輩、どうか後者の先輩になって欲しい。

子どもをどうか受容してほしい、ありのままを受容してあげれば大人を信頼し、子どもは安心、安定して過ごせる。そうすると自発性が芽生える。子どもを受容するには、親自身が誰かに受容される経験が必要。子どもに向き合えるゆとりを保障し、親を支えることが、結果的に子どもの支援となる。（渡辺）

第3分科会　減災の視点でみる「ひろば」

人文棟 205 教室　　参加者 41 人

災害時、災害後にひろばが乳幼児の子育て家庭の安心のために果たす役割や避難親子への対応について考えました。ひろばスタッフとしてどのような姿勢で利用者に接したらよいのか被災経験をもとに伺いました。

●助言者

新潟大学大学院保健学科研究科看護学分野教授

佐山　光子さん

●コーディネーター

NPO 法人やまがた育児サークルランド代表

野口比呂美さん

●事例発表

NPO 法人多世代交流館になニーナ代表理事

佐竹　直子さん

仙台市子育てふれあいプラザのびすく泉中央副館長

小川　ゆみさん

＜事例報告＞

「地域みんなではぐくむ子育てと防災」

佐竹直子さん

中越地震の避難所支援を行なった際に、日が経つにつれて子育て世代が減っていった。社会の縮図だ、社会で子育てを応援しないといけないと感じ、多世代・多文化・多分野が交流できる場づくりを始めた。中越地震の仮設住宅に住むお年寄りに講師になってもらっての郷土料理教室をきっかけに、支援する側とされる側を作らない関係を意識してやってきた。子育て支援も同様で当事者の母達から、小さくてもいろんな力、できることを引き出すようにしている。現在福島からの避難者を受け入れる事業を行なっているが、福島ママをお客様にしないでスタッフ、仲間になってもらい、参加者を受け入れる立場になってもらっている。また積極的にいろんな立場の人、団体、行政、学生ボランティア等と日頃からつながっていくことが防災につながる。災害時に浮かび上がるものは、日常的には見えないものが見える。災害があったからこその気づきをいかし、子育ての枠を超えてつながり、豊かな子育てにつなげている。

＜事例報告＞

減災の視点でみる「ひろば」

小川ゆみさん

地震時のマニュアルはあったが、想定する状況と違い（揺れが収まらない、指定避難場所まで避難できない等）があった。震災後マニュアルの見直しや、スタッフの話し合いが必要になった。災害時にはスタッフの不安が出ると母親や子どもに伝わる。スタッフの声かけが地震の苦しい気持ちの軽減につながる。実際に訓練で声に出してみる、小さい地震でもやるといった日頃の取り組みがとっさの対応に出る。

災害直後には建物が使用できず、スタッフができることを考え、駐車場でのひろば活動、電話相談、ブログでの情報発信も行なった。閉館中にスタッフの受入体制、母、子、支援者の心のケアの研修を行なったことで余裕をもって開館できた。スタッフのスキルが向上して日常会話に終わらず、深くまでじっくり話せるようになり相談件数も増加した。専門家や行政が手一杯になり、連携が取りづらくなり、同建物での相談場所も設置し、ケースに応じて対応ができるような体制を整備した。ひろば本来の役割を行うことが震災後のケアになる。元気に見える利用者も問題を抱えていることがあるということは同じ。スタッフの役割を

再確認し、「ひろばの利用者に向き合う」というもともとやっていることをしっかりやることが大切だと感じている。

山形での福島避難者への対応について

野口比呂美さん

山形でも防災意識は高く、訓練をやっていた。そのため今回はマニュアル通りの動きができた。地震時は今の母親は慌ててしまうことから、子どもをどう守ったらよいかも学んでもらう必要がある。災害後には福島からの避難者が急増した。避難者は①母子での避難、②経済的負担感が大きい、③孤立④不安が大きいといった特徴がある。通常ひろばでの受入、出前サロン、サークル支援などの支援を行なってきた。山形は人数が多く見えやすかった。避難家族は全国に散らばっているので、自分たちのひろばにもきているかもしれないと心にとめておいて欲しい。普段からのひろばスタッフの姿勢、寄り添う気持ち、アンテナの立て方、キャッチの仕方が大事なことを学んで活かしてほしい。

＜助言者よりミニ講座＞

「被災時の母子研究を通して」

佐山光子さん

中越地震の被災者（当時妊娠中、乳幼児の母親）に毎年５年間インタビューする研究を行なった。キーワードは「サバイバー・ギルト」。生き残った自責感、災害時にもっとできたのでは、こうあらねばならないというストレス、自責の念、無力感が大きい。どんなにひどくてもその時なりの判断を発揮しているという当たり前の感覚、「それでいいんだ」という思いが出てこない。また支援には、ケアする・される側、専門家・被専門家の力関係にくみこまれやすい。被災者への尊厳、尊重が大事。研究者等の心のケアはずっと続くわけではないが、ひろばでは災害後も長い関わりを持っていく。災害だから話を聞くのではなく、何の価値観も持たずその人の話を聞くという姿勢が大切。人は語ることを繰り返し、自分を見つけていく。常に同じ関係性を持ちつつ、同じ時を過ごし、学び合い、ここを越えていくという姿勢が大事だ。

感じたことをポスターにするグループワークより

- 愛を持って、ママ、子どもへの声かけをすること。その時に一緒にいる人たちと共に時を過ごすことが大事だと感じた。
- 命を守ろう。守れないことが起こりうる。子どもも自分で考えないといけない。
- すぐニーズがわかる仕組みづくりができれば支援ができる。早く復興してほしい気持ちは一緒であることを確認した。
- マニュアルは役に立たないけど、大事。普段からの心がけが大事だと感じた。
- 地域のつながりが大事だ。ただただ聴くことが愛。
- 「罪の意識」について聞くことができて、感じていることは一緒だと感じた。

＜まとめ＞

わずかな時間でも、心が通って共通のひとときをもったことが災いを減らす一歩につながる。（佐山）

被災した立場として力をもらった。遠いところに何ができるのだろうと思ってくれているだけで嬉しい。それだけで十分だ。あなたのことを思っているということを声にするだけで十分だと感じた。（小川）

感じちゃいけないという感情はない。（佐竹）

災害は助けてくれる人がいるといい、離れているからこそできる支援もある。縁を大事にして欲しい。（野口）

※具体的な被災、支援データについては、冊子資料を参照してください。

第４分科会　「ひろば」がになう虐待予防の役割

第２講義棟 202 教室　　参加者 83 人

自己肯定感を高めて支えていくことは、目に見える形の支援ではないかもしれないが「ひろば」は地域の中で安心できる身近な場所として重要であり、それが予防につながっているということが話し合われました。

●コーディネーター
関西学院大学准教授　　橋本　真紀さん
●コメンテーター
真生会富山病院心療内科部長　　明橋　大二さん
●事例発表者
NPO 法人ゆめきゃんぱす副代表理事
児玉久美子さん
聖ルカ保育園地域子育て支援センターおひさま園長
清河　直美さん

＜事例報告＞
どの事業も虐待予防の目線をもって

児玉久美子さん

ゆめきゃんぱすは、２００４年に行政の呼びかけによって設立した公設民営。当時は、受託事業ばかりだったが、その事業の中から親のニーズに応えることで、現在は様々な事業を行っている。様々な支援をしている中で気づいたことは親子の行動が問題ではなく親子を取り巻く何らかの事情や原因が問題で、大切なのは親への信頼が基本にあるということ。虐待は他人ごとではない、どこの家でも起こりうる可能性があるので、どんな事業も虐待予防の目線をもって活動している。またひろばに来ている親子も他の親子とつながっていくと、笑顔が多くなり、エンパワーメントが高まっていくように感じた。その意味でもつながる場は大切と思い講座を企画している。例えば、学び合う！支え合う！仲間ができる講座として【ノーバディーズパーフェクトプログラム】があり、単なるママ友ではなく、助け合うことのできる仲間作りができる。またプレママ・０歳児親子の交流の場【おしゃべりん場】では、ファシリテーターが中に入り親子をつなぎ、安心できる居場所の提供を行ったり、専門家（助産師や保健師）がいることで０歳の親子を外に引き出したりしている。そして自分の“少しできる”を教え合う手作り講座【だれでも先生】では、親のエンパワーメントを高め社会へつないでいる。自分の話を聴いてくれる、自分のことを思ってくれる人と出会ってほしいとスタッフは願っている。そして寄り添うこと、親の力を信じること、コミュニケーションを大切にすること、毎日の出会いを丁寧にして、親子の笑顔が少しでも増えるようにお手伝いができればと思い活動している。

＜事例報告＞
地域連携で取り組む虐待予防

清河直美さん

聖ルカ地域子育て支援センターおひさまは２０００年７月に同保育園内に開設。給食の試食、体験保育、育児講座、季節の行事、戸外活動のほかに９つのサークル活動が行われ、お母さん同士話をすることによりストレスの解消や問題解決にもなり、虐待予防にもなっている。また館林市内の４園が連携し、生後４～５か月の乳児と保護者を対象にした出前ふれあい保育の実施、１０か月検診において手遊び・絵本の読み聞かせ・子育てワンポイントアドバイスなどの実施、親子リズム運動の実施、館林地域子育て連絡会議の実施をしている。この地域連絡会議は子育て支援の一層の推進を図るため、子どもを取り巻く関係施設、機関が連携し一体となった事業展開がされるよう研究討議される場になっている。この会議は平成１１年から開催され、当支援センターは平成 12 年３月から参加している。会議では家庭児童相談員が講師となり虐待防止についての説明を受けるなどしている。平成１６年から講演会を開催し、虐待予防について児童相談所の相談員から講演していただき、架空の事例検討会も行うなど

している。またテーマを決めてグループ討議を行って連携を深めている。課題としては、連絡会参加者の中でも、行政機関などは毎年のように担当者が変わるため、連絡会参加者の理解度にばらつきがあり、より深めた内容に発展するまでに時間がかかる。また、ファミリーサポートセンターのように一時的に子どもの預かりができる制度があると良いのではないかと思う。

＜コメンテーターより＞

地域子育て支援事業がになう虐待予防

明橋大二さん

これからの支援を考えるときにキーワードが３つある。一つは自己肯定感、２つ目は相手の力を伸ばしていくエンパワーメント、３つ目は人として対等、人としての尊厳、信頼していくというパートナーシップがある。その中でも最も大切なものが自己肯定感である。この自己肯定感が低くなっている人が虐待につながっている。その点から自己肯定感をいかに高めて、支えていくかが極めて重要。虐待者の特徴として、支援を求めている人、支援を拒否する人、支援を求める気持ちが動揺する人がいる。私たちの役目は支援を求める気持ちが揺れ動く人をいかに支援に乗せていくかが大きな課題。こういった揺れ動く人の支援のきっかけが、ひろばである。

親からも否定され、友達関係でも気を使い、何か言ったら無視されるのではないか、いじめられるのではないかという不安が強い。そういった意味でも、ひろばは安心感を提供する場所で非常に大事である。昔のサークルもよかったが、肯定しあい、支え合える場であればよいが、ボス的な人がいて、その人に気をつかったり、その人に嫌われたらそこにはいられないということになったら、そのサークルも決して安全な場ではなくなる。安心、安全を確保するにはファシリテーターや、スタッフの役割が大切になってくる。よくひろばや講演会に来る人は大丈夫と言われるが、決してそうではない。虐待する人は両極端で、一方は見るからにしそうな人、もう一方は身なりもきちんとし、高学歴、高収入という人がいる。周りから見ても大丈夫と思われているが、実は自己肯定感が非常に低い人がいる。こういった人は親の前でも手のかからない良い子で育ってきている。マイナスな感情を親の前で出した経験がなく、我慢して生きてきた。ところが子どもは騒ぐし、わがままを言う。そんな子どもを見ていると自分自身が我慢してきた辛さがよみがえってくる。そういった悩みを抱えた人もいるかもしれないと、心に留めて声をかけていくことが必要。そういった人は、みんなの前で良い子になってしまう。突然スタッフから「叩いているでしょう」などと言えないので「つっこみカ」が大切で、関西では相手の悪いところ、ダメなところを見つけて笑いに代えていく。決して否定ではなく受け入れてもらっているとホッとする。行政機関や相談機関などに行くと、否定されるのではないかと思う。自己肯定感が低い人はなおさらで、まず身近に行けるところがひろばである。信頼感、安心感、安全感をもってもらえるような関係を作っていくことが大切である。

＜コーディネーターのまとめ＞

橋本真紀さん

大切なことは、支援者側が虐待予防を唱える前に３つのキーワードを意識しながら支援を行っていくこと。利用者、スタッフだけではなく利用者同士、支援者間も大事であるが、もっとも難しいのが支援者間同士なのではないか。いかに支援者間同士の連携を取る環境作りをしていくか課題になっている。ひろばは親子で一緒に集える場という特性があり、親子の自己肯定感、双方の自己肯定感をスタッフは支えることになる。親子が抱えている課題を親子自身の問題ととらえず、親子と周囲の環境にあるという視点が大切である。また、あまり虐待相談、予防と表に掲げない方が良いのではないかとの声もあり、それらを大きく掲げすぎるとひろばに行き難くなる。看板は遊び場、ひろばにして、そこに来られた人のニーズを個別に適切に見極めていく必要がある。私たち支援者は直接、虐待支援に関わっているのかどうか見えないが、環境の中でどこかにつながっているということ、拠点というのは地域の中にあることを忘れないようにしたい。

第５分科会　「ひろば」のこれからの 10 年を大いに語ろう！

講義棟３０１教室　　参加者 115 人

地域の現場で活動に取り組んできた当事者の事例発表に、長く全国各地の実践を見守り、支えてきた研究者の見解を交え、「ひろば」の 10 年をふりかえり、これからの 10 年を見渡し、今後のあり方について意見をかわしました。

●講師
関西大学　教授　　山縣　文治さん
●助言者
白梅学園大学・同短期大学学長　　汐見　稔幸さん
●コーディネーター
NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会理事長
奥山千鶴子さん
●事例発表
NPO 法人アンジュ・ママン　施設長
小川　由美さん
NPO 法人ヒューマン・エイド２２代表
椎谷　照美さん

＜コーディネーターより＞

奥山千鶴子さん

子育てひろばをめぐる社会状況について、これまでの 10 年をふりかえると、市町村合併、NPO 法人の制度化、女性の大学進学率および就労率の増加、晩産化などの変化が見られた。現在、行政側では子ども・子育て支援の新しい施策が始まりつつある。これからの 10 年、ひろばはどうあるべきなのか、「夢」も含めて議論できればと思う。

＜事例報告＞

小川由美さん

大分県豊後高田市でアンジュ・ママンという子育て支援団体を平成 19 年からスタートした。この団体は市が直営する「つどいの広場」で出会った母親たちが、「自分たちでできる子育て支援があるのでは」との思いで立ち上げた組織である。市からの事業委託を受けながら、利用者、外部機関、地域とつながり、支援の輪を広げることで、地域子育てサポートや病後児保育にも取り組んでいる。平成 23 年からは「新しい公共」の考え方から、ＮＰＯ、行政、商工会議所、商店街など６団体が協働運営する「おひさまひろば」をオープンした。商店街で、ベビーカーの貸し出しや短期託児などができるようになった。家庭支援のアウトリーチなどの取り組みも始めるなど、より地域に開かれたひろばづくりが目標になっている。これからの１０年を見渡すと、「人材育成」が大きな使命であり、私たち支援者の役割であると感じている。

＜事例報告＞

椎谷照美さん

新潟市秋葉区で子育て支援センター「育ちの森」を拠点に１０年にわたり事業を実施している。交流、相談、学習など各種のサービスがあるが、利用者一人ひとりのニーズに合ったものを選べるようメニューを豊かにし、かつ、複数のサービスを結びつけて利用できるよう配慮している。支援の源は「人」である。スタッフは１１人。マルチな業務と専門的業務を通して個性、持ち味、得意分野を活かしている。利用者をスタッフに採用するなど、利用者目線を大切にした事業運営を行っている。口コミで施設の存在を知り、訪れる利用者が多い。地域との連携にも取り組み、中学校内でサロンを開催し

ている。10 年を振り返ると、利用者が求めているセミナーや支援に変化が見られる。保護者の相談件数が増えている。昨年度は 3,000 件を超えた。地域の子育て環境や人材を育てていくためにも、学校や子育てサークル、地域に「出向く支援」の必要を感じている。

＜講師より＞

山縣文治さん

法改正により子育て支援センターが第二種福祉事業となり、保育所と対等の位置づけになった。これからの 10 年を考えた場合、センター、ひろばなど拠点事業の固有性について考えていかねばならない。期待したい点が５つある。一つは、当事者視点で拠点事業を意味づけ直すという点で、母、妻・主婦としての存在に偏らず、女・人間であることの目線を大切にする事業展開を考えていくことである。二つ目は、子育ては常に楽しい、いきいきしなくてもよしとする、“がんばりすぎない”支援を考えるということ。第三は、ひろばにおいては、ジェネラリストとしての専門性、「多様な人材」が集まる集団であることを大切にすることである。四つ目は、支援者間のネットワークと利用者間のネットワークをつなぐ、という問題意識。五つ目は、コミュニティワークの視点をもった機関としての展開を図ることである。新しい動きとなる市町村の育成会議に自分たちの席をつくるべきだ。今後の１０年、次の代表者となる者をどう育てていくかが課題となろう。

討議

１０年をふりかえる

汐見稔幸さん

エンゼルプランの施策として子育て支援事業がスタートした当初、保育所が従来の保育事業と両方やるという形だった。その後、地域で独自に取り組むＮＰＯが各地でできるようになり、働いていない親に対するサポートが新たなシステムと意味づけられ、拠点事業として制度化されていった。その経緯は、保育所と似ている。かつて、お寺さんで共同保育所なるものができたとき、０歳児一人を１０人で見ていた。２０年後、３０年後を考えたとき、現在の保育所と子育てひろばの力関係は逆転するのではないだろうか。すなわち、ひろばが次世代育成の基本モデルとなることで、そのひろば事業の一つに保育所機能が吸収再編されていく動きがみられるのではないか。

＜まとめ＞

これからの１０年に向けて
ー行政との協働、人材育成

●市が直営するひろばに、子どもを連れ利用しながら声を挙げ、つぶやきを重ねていった。行政担当者は当事者の声を拾い上げて事業化してくれた。それが、利用者の使うひろばは利用者さんにという動きに発展していった。「おひさまひろば」の実施により、まちの中に支援が広がっていった実感がある。事業の広がりにより、住民の多様な層が利用することになる、伴う変化を恐れずに声を聞いて必要な支援を考えていかねばならない。（小川）

●迎える支援、出向く支援に力を入れている。元母子推進委員の経験ある人たちに研修を行い、地域で実施している出張サロンに参加してもらっている。

4,000 部の子育て情報フリーペーパー「ここから」を無料で発行している。

育ちの森のもう一つの顔として、様々な情報を発信している。今まで、育ちの森を知らなかった人が知るきっかけにもなる。大学生の実習、学びの場としても積極的に受け入れ、次世代育成にも力を入れていきたい。（椎谷）

●今後も、ひろばが引き受ける社会のニーズは増えていくであろう。３０年後、子どもの数は現在の半数になる。７５歳以上の高齢者割合は大きくなる。皆が皆、上手に年を取っていく社会をつくっていかねばならない。農の問題なども重要だ。ひろばは世代間交流拠点としての役割を期待されるであろう。（汐見）

●ひろばの事業体制、組織運営において親は利用者ではなく参加者であるという認識は大切である。ひろばは、公共資源であることの自覚をもって運営していかねばならない。ただし、“守り”の姿勢ではいけない。行政との関係においても、批判的協働関係を築かねばならない。親子中心のネットワークから地域住民の生活ネットワークへ、ひろばに集まる人と構築していくことが大切だ。（山縣）

第６分科会　施設見学とワークショップ

講義棟３０２教室　　参加者 36 人

上越市内のファミリーヘルプ保育園（24 時間保育園）・こどもセンター（地域子育て支援拠点事業ひろば型）・わたぼうし病児保育室を見学後、地域のニーズに応える「ひろば」について検討しました。

●コーディネーター
　上越教育大学 准教授　　杉浦　英樹さん
●コメンテーター
　練馬区立大泉子ども家庭支援センター 所長
　社会福祉法人雲柱社 施設長　　新澤　拓治さん
　NPO 法人新座子育てネットワーク 代表理事　　坂本　純子さん
●現地説明者
　塚田こども医院 院長　　塚田　次郎さん
　NPO 法人マミーズ・ネット（こどもセンター受託団体）、
　上越市こども課

施設見学

①　ファミリーヘルプ保育園

全国でも珍しい公立の一時預かり専門の 24 時間対応の保育園です。

この日も０歳～5 歳まで約 20 人が利用していました。込み合う日は 50 人を超え、特に年末 29 日と春休みは利用が大変多いそうです。

参加者からは、設立の経緯や利用実績、職員体制等について、熱心な質問が出されました。

②　こどもセンター

上越市の子育て支援の中核施設です。遊戯室は大小あわせて約 600 ㎡あり、雪国上越では子ども達の冬期の貴重な遊び場となっています。講座やセミナーなども積極的に行い年間利用者は 11 万人を超えています。市内の子育てサークルが子どもを遊ばせながら無料で利用できるグループ活動室が注目を集めていました。

＜塚田院長の説明も力が入っています＞

③　わたぼうし病児保育室

塚田こども医院の塚田院長が「困っている保護者」のため、平成 13 年に篤志で開設したのが始まりで、平成 21 年 5 月から上越市の病児保育事業として受託運営しています。

塚田院長から、病児保育の必要性や困っている保護者のために実践している「断らない病児保育」について、説明を受けました。

ワークショップ

地域のニーズに応えるためにひろばの支援者にはどのような条件づくりの必要があるかについて、コメンテーターのお二人より、コーディネート機能の観点から示唆と助言を得ました。

＜コメンテーターより＞
寄り添い、理解するコーディネート

坂本純子さん

子育て支援情報を単純に羅列し、実際にそれを利用したい人のマッチングを行うだけならアプリケーションでも可能かもしれない。しかし、その支援が本当にその親子に対して適切なものかどうか判断するためには、確実に人間の介入が必要。親子の状況は個別で多様だから、寄り添う力が求められる。

また、利用者側とサービス提供者側の両方を理解し「この町には次はこういう改善が必要だ」「次はこういう機能が必要だ」という開発・改善の視点を持って連携をつくっていくということも、コーディネート機能のとても大きな部分であると思う。

＜コメンテーターより＞
自己決定力を支えるコーディネート

新澤拓治さん

コーディネートは利用者に外部の施設を勧め、送り込むことではない。「あなたここに行きなさい」ではなく自分で「そこだ」と思って行くのが本当だ。だからこそ、人が介在しなくてはならない。「ひろば」という人と人のつながりの中で、利用者が自己決定できるための力をどういう風に育んでいくのか、成長できる機会をどれだけつくれるか、そうしたことをセットで捉えることによって、本来のコーディネートがなされていくと思う。

＜現地説明者より＞
親の思いを受けとめて

塚田次郎さん

病児保育の経費は一人当たり１日１万円かかっているが、利用料金は２千円。もっと下げろという声もあるがあまり安くしたくはない。これはけっして経費の面からの思いではなく、利用する親御さんに対して「この施設を疎かに考えてほしくない」という願いがあるから。

親御さんには「子どもが病気になってしまった」「一緒にいてあげられない」など様々な思いがある。保育士は笑顔で親御さんを送り出している。

＜コーディネーターより＞

杉浦英樹さん

「ひろば」というのは本来、異質な人たちが寄り合い、互いの話を糧に新たなアイデアを創造するコミュニティの核となり得る場。そうした場におけるコーディネートの在り方について、これからも考えていきたい。

全体会　実り豊かな子育てのときを　ひろばで支える

上越教育大学講堂

～講演～

●講師　白梅学園大学・同短期大学学長　　汐見　稔幸さん

親子支援を中心に新しい社会づくりの拠点に

現代社会の特徴と課題として、「消費化＝なんでも買って済ます時代」ということがある。資源の無駄遣い社会を作り、つくることの大事さの感覚とその実際的能力を人から奪う。生きる手ごたえはよいものをつくる活動の中にある。「資源無駄遣い社会」から「資源循環型社会、エコ社会」をどう実現させるかが課題。

孤立・孤独社会化（ホテル家族化）「隣の人がどんな人か知らない」が当たり前などということは人類史上初めて。赤ちゃんからおじいさん・おばあさんまで一緒に暮らしているのが本来の社会。どうやってワイガヤ保障社会、世代間交流社会を作るかが課題。

男女の役割が無理に固定されてきたが、「男女の相互乗り入れ社会」にする必要がある。どの時代でも男と女の役割分担や男の文化、女の文化、がある。お母さんしか子どもに接しないと、片一方の文化しか伝わらない。子どもを

育てるのに、男女同じようにかかわる社会をもう一度考えなくてはいけない。男がやっていたところに女が、女がやっていたところに男が入っていくことがこれからのテーマ。

「生活のことは政治家にお願いする社会」、誰かにやってもらう社会は危険。自分たちが参画して自分たちのことは決めていく、「市民参画型社会」をどう作るのかが課題。

そして子育てを社会が本気で応援する社会作りが課題となる。子どもの育ち・育ては人類の一番大事な仕事。それぞれの時代の問題を議論し、解決していく力を次の世代に育てていく、ということが人類普遍の仕事。

子どもの育ちは歴史の中で見ると、現在が大きな節目。少し前までは子どもたちは「子どもの社会生活」の中で人間性の基本を鍛えていた。すなわち、「地域での『放牧』生活＝冒険遊び。この中で社会性、工夫する力、柔軟性を鍛える」「家の仕事の手伝い、一人前になる訓練」「団らんと行事への参加」という３つの場により、子どもは育ちが保障されていた。現代社会の最大の特徴は、この３つの場が全部なくなったこと。育児の家庭内化・言語主義化、個人化、女性化へ。それでうまく育つかどうか、今は実験中。途中だが、虐待が増えてきた、子どもの運動能力が下がってきた、切れやすい子がたくさん育ってきた、学力も心配などマイナスの指標がたくさん出ている。プラスの指標は出ていない。いつの時代でも必要だったこの３つの場がない中で、子どもをどう育てるのかが課題といわざるを得ない。育児の社会化社会の実現が課題。

「資源循環型社会」「世代間交流型社会」「消費・生活バランス社会」「男女共同参画社会」「子育て支援」「市民参画型社会」、これらと親子支援を組み合わせ、新しい社会づくりの拠点となるのが、ひろばの役割。つなげること。

「つなげる」がキーワードになる。知らない子の大声はうるさく感じる、という東京都足立区の児童公園の例がある。「みんながみんなを知っている社会」を作っていかない限り、本当の子育て支援にはならない。

中でも「市民社会づくり」が大事な課題。人間には、「人」という側面と「市民」という側面があって、この二つを全うする人間が本当の人間。だから、ひろばでは、市民性を鍛える場～議論する場～としてサロン機能を強化してほしい。

～分科会報告～

第１分科会

失敗を重ねることで見えてくる！“失敗をおそれない”

第２分科会

子どもも大人も＜エンパワメント＞されて地域社会が元気になる！

第３分科会

災害体験者からの「学び」「共有」「つながり」

サバイバー・ギルト（罪悪感）への共感、支援できないことの共感

第４分科会

自己肯定感を育てるためのつっこみ力

第５分科会

支援者に必要なのは・・みわたしていく力・・

それは地域人材、行政、歴史、過去、未来を含めて！！

第６分科会

上越から全国へ

現場「こどもセンター」「わたぼうし」「ファミリーヘルプ」の志・つながり・共感・仕組みづくり・共有・発展コーディネート

～パネルディスカッション～

●コーディネーター

NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会理事長

奥山千鶴子さん

●パネリスト

白梅学園大学・同短期大学学長

汐見　稔幸さん

長野県短期大学専任講師

金山美和子さん

社会福祉法人雲柱社施設長

新澤　拓治さん

奥山　年に一回は同じ事業をしている仲間と確認しながら進めていこうと、この実践交流セミナーが始まった。10 年の間に、センターとひろばが同じ事業として社会福祉事業に位置付けられた。セミナーも、公的な事業としての役割を一緒に考えあっていく研修の場に変わってきた。

昨年は「ガイドラインの手引き」を、研修とネットワークの集大成として作った。昨年の大阪大会では、「『子育て支援の専門性』については、明らかになっていない。実践の中から見出していく」という話があった。１１回目の今回は、これからの１０年に向かい、一回立ち止まって見直して進んでいこう、と今回のテーマを考えた。

新澤　「価値観との戦い」と言うか、父がよく「時代への挑戦」と言っていた。元は保育園で働いており、先駆的に子育て支援を始めた。戦後の混乱期に貧しい地域で必要とされてできた保育園だったが、就職した頃は、裏の家でも預けたい人が預けられない状況になっていた。制度ができると点数が高い人しか入れない。仕組みの中で地域のつながりが薄れてしまった。それでも地域の中に保育園を開放してきた。

今日の汐見先生の話を聞いて、そうだな、と感じるが、来ている親たちの価値観、考え方とどう共感し合えるか。アットホームな関わりを持つ活動では、その親密さ故、新しい人が入りにくいといった苦情が届くこともある。その人も「自分を見てほしい」「関わってほしい」という気持ちがあるのだろう。コミュニケーション不全と言われているが、反対にコミュニケーションを求めているのではないか。汐見先生の言うワイガヤ文化を作りたい。情報に振り回され、子どもに振り回されている人もいる。それを、ただ笑ってしまうのではなく、そういう中で生きている、ということを受け止め、そこに向けるまなざしが大事になる。支援者がワイガヤ文化、AKU を保障していく。来ている人とそこを共感し合わないといけない。ひろばの中での対話がどれだけできるかが大事。

奥山　「豊かな」をどう作っていくか。親としての戸惑いがあり、なかなか自分の気持ちの殻を破れない。それを見ているスタッフも、どうアプローチしていこうか、ということが「価値観の戦い」ということなのでは。今どんな状況なのかな？と推測しながらの親子と関わるスタッフの難しさを感じる。

金山　「実り豊かな子育て」というテーマに沿って自分の子育てを振り返った時、たくさんの宝物をもらったと思った。１６年間一緒にいて、その日にあったことを一緒に笑い飛ばしてもらえて気持ちが明るくなる、そんな友達を得た。一緒に子育てをした人たちとＮＰＯ法人を立ち上げ子育て支援をしている。参加者の中にも同じ思いを持つ人も多いかもしれない。子育てを通してできた仲間たちで「こんなひろばがほしい」と子どもの手を引きながら行政に話しに行き、理解してくれる人に出会い、全国各地でひろばができた。ひろば事業が始まり、今まで手弁当でやっていたことにお金がつくようになった。この上越では、NPO 法人が市のひろばを受託し、少し雇用の場ができてきた。

これからは市民参画社会。今子育てしている人たち自身が、子育て支援を消費するのではなく、役所に苦情を言って終わるのではなく、「ないなら、作ろう」と考えたり工夫したりする、自分が主役だと思える市民になるための経験が必要。親も子も自ら気づき行動できるようなきっかけや場をつくることを大切にしたい。

奥山　クレームが上がってきたときに、仲間に引き込んでいく方法を考えていくということでしょうか。クレームに対して、返せる力も大事だと思う。

渡辺久子先生が腕白小僧を作らなくてはいけない、という話をしていた。汐見先生は放牧をして育てていかなくては、と。ひろばは、それができる可能性がある。ところが、こういう研修の中で「お母さんが、子どもを全然見てない」と話題になる。ひろばの中で「放牧して育てる」ことを、どう実現するか？「子どもの育ち」とひろば、についてどう考えていったらよいか。

汐見　放牧が成立する条件、というのがある。放牧とほったらかしにする、というのは違う。危なかったら、自分の子でなくても、ちょっと声をかけてくれる。子ども同士で解決できるよう見守る。など、お互いの価値観が上手に文化として成立していないとひろばの中は難しい。

金山　ひろばの広さも影響するのかと思うが、「親が責任を持って子どもを遊ばせてください」と書いてあるひろばが結構多い。そこでは子どもをリモコンで動かしているように後ろから親がくっついて歩く。保育園の２歳児は、自分の好きな遊びをしたり、子ども同士でおもちゃを取りあったりしているのに、ひろばの２歳児は、後ろで親が干渉したり止めに入ったりしている。

奥山　放牧させるためには、条件がある。親が後ろを追いかけなければならないひろばなのか、お母さんたちが子どものおもちゃの取り合いを、おおらかに見ていられるひろばなのか。その成熟度合は、スタッフがどれだけ手と目をかけ、常連さんがその文化をひろばに残してくれたか、にかかる。

金山　クレームがないひろばを目指していると、支援する人は、すごく窮屈。小さなクレームは受けることを覚悟することも必要。こういう子どもを育てたい、という思いを利用者と共有できるきっかけにもなると思う。

奥山　昨日の渡辺久子先生の話の中に０歳から４歳までは本当に安全な場でアクセルとブレーキを踏む練習をしない限り、加減がわからない、という話があった。安全に試せる場所がひろばだとしたら、その環境をどういう風にスタッフが親とともに守れるのか、が肝心。

汐見　「子どもにちゃんと育ってほしいから、支援をする」という関係が必要なのではないか。つまり、子育ちを支援するために、子育てを支援する。

今の子どもたちの育ちはどうなっているのか。例えば、育てた子どもが、ちゃんと育って満足ですか？というアンケートでアメリカなどの母親は８５％が満足。日本の母親は３０数％。子どもの育て方自体に、ボタンのかけ違いがあるのではないか。高校生の自尊感情の調査で、「自分に満足」がアメリカは４０数％中国３０数％。日本は３、９％。比較にならない。一ケタ違う。引きこもりの若者が１００万人とも言われている。欧米にはいない。極端な自尊感情の低さはどうしてか？育て方にあると考えるしかない。日本の医者の調査では、0,1,2歳児の育て方だ、とのこと。

赤ちゃん学会で共通にわかってきたことの一つは、「子どもは、自分で自分を発達させる力がある。」ということ。歩くようになると、なぜか走りたがる。走れるようになると、どこかに上りたがる。そういうことができるような環境と、何回失敗しても「大丈夫。痛かったら、とんで行っ

てあげるからね」ということと、「いろんなことに挑んでいるあなたって、おもしろい子ね」という暖かいまなざしとがあれば、どんどん挑んでいく。大人の一番大事な役割は子どものチャレンジを「邪魔しない」で、安心感をひたすら与えること。全部任された母親たちが、心配で仕方がない、という気持ちはわかる。「子どもってこういう存在、十人十色で面白いね。安心していいよ」ということを、伝えたり、学んだりすることがひろばのテーマ。

奥山　一人目はできなかったが、二人目、三人目の時は自然にできていた。ひろばで、第２子第３子の親がいると、寛容で自分の子どもを見ないで、ほかの子を見てくれる。第１子だと、どうしても見てしまう。だとしたら、むしろ、親でない人が関わる方がいい。スタッフやボランティア。今回、汐見先生も渡辺久子先生もみなさんおっしゃったのは、「おばあちゃんの力」。心根の優しい物静かなおばあちゃん。地域の潤滑油、子育てのキーマンだった。ひろばの中にもっと地域の多様な世代の人を入れて、心根の優しいおばあちゃん、おじいちゃんが子どもとかかわってくれる空間も必要。

新澤　０歳から３歳の世代と付き合える、０歳児の９割が在宅で、そこを対象にできる、ということはありがたい。「誰かを信じられる原点に」とレジメに書いたのは０歳から３歳は子どももそうだが、親自身も発達段階から行くと０歳かもしれない。そういう時期に出会える、ということ。自分で発達する力を持っている。信頼関係ができたり、また、学習できたりということが大事。ひろばが１万か所できて、ひろばに来ているからいいとは限らない。良い出会いがあるかどうか。どういう感性を持ってみるか。子どもにとっても、親にとっても、人との出会いは大切。

　鬱的な母親が、子どもに悪影響を及ぼすのではないかと心配し、自分はあまりかかわらない方がよいのではと悩んでいました。その姿をみて、子どもへの思いや切ない気持ちを思うと泣けてきた。子育て中の親たちの様々な思いを受け止めながら、一緒に考えていきたい。

金山　昨年大阪のセミナーで「子育て支援の新しい専門性を一緒に考えていきましょう」と言ったが、１年たっても私の中ではまとまっていない。「ソーシャルワークの視点や包括的支援の視点が大事」であることがこれまでの実践からみえてきた。１０年のスパンで理論と実践を大きく育てていけたらいいと思う。

汐見　赤ちゃんを育てるお母さんのメンタルヘルスがすごく大事。お母さんにゆとりがあって、「赤ちゃん産んでよかった」という気持ちがあればいい。そのためにこの組織がどれだけ大切か。やっと制度化されてきたところではあるが、ここに課されているものは、ものすごく大きい。子育ての仕方を、「こうした方がいいよ」とここで伝えていくしかない。

　同時にこの力を社会的に承認されるためにきちんと学問に乗らないといけない。データを取って、公共政策に乗せていく。研究交流誌～子育てしている人たちも読んでためになるし、支援している人たちの実践交流になる、そういう雑誌を作っていく、というのが次のステージに要求される。

奥山　「０、１、２、３育ちの詩」を２年続けて助成金を得て発行してきた。定期的に発行し理解してもらうことが大事。

　１０年ということで宿題をもらった。１０年後中学生になった子どもたちの自尊心が改善されているのか。９割の在宅子育て家庭の子どもたちが初めに出会う、私たちの役割は大きい。子どもたちの育ち、親たちの子育てのしやすさ、しにくさ、に大きな影響力を持っている。「人間だれしも多重人格、組んだ相手によって引き出されるものが違う」という渡辺久子さんの言葉があった。何を引き出されて、何を差し上げられるのか。それによって、親がエンパワメントされるのか、子どもたちが生き生きと育っていけるのか、決まってくるとすると、私たちは真摯に努力を続けなくてはいけない。

写真で振り返る　＜会場の様子＞＜交流会＞

会場

会場となった上越教育大学。色鮮やかな木々が来場者を迎え入れていました。

託児

（上）【情報交換コーナー】
各地の支援拠点情報や、上越市の子育て支援拠点施設の情報を提供しました。

オプション

交流会

料理は、上越の郷土料理。他地域では珍しい、サメの煮凍りや、色鮮やかな押し寿司。Ｂ級グルメのホワイト焼きそばもふるまわれました。

１日目に行われた交流会。お料理を食べながら、お酒を飲みながら、話は尽きません。１７７名の参加がありました。

『越後上越 上杉おもてなし武将隊』の演武に会場も大賑わい。最後には会場を巻き込んで「勝どきをあげよ！」「えい、えい、おー！！」

（上）利き酒コーナー。米どころ・酒どころ新潟の地酒の飲みくらべ。たくさんの方に楽しんでいただけました。

（左）書籍販売、上越のお土産コーナー。地酒・地ワインなど多数販売されました。

新聞記事

新潟日報　2012 年 7 月 25 日掲載　↓

上越で子育て全国セミナー

子育て支援を考える全国セミナー「子育てのときを実り豊かに」（県主催）が11月、県内で初めて上越市で開かれることになり、参加者の募集が始まった。事務局を務める同市のNPO法人マミーズ・ネットは「さまざまな層に参加してもらいたい」と呼び掛けている。

セミナーは11回目。上越教育大学を会場に11月10、11両日、全国の自治体などが設置する親子交流の場「子育てひろば」の活用について意見を交わす。

10日は慶応大学病院外来医長の渡辺久子医師（小児精神科）が基調講演し、その後、国や上越市の担当者を交え、ひろばの在り方を展望する。

11日は六つの分科会で、ひろばが災害対応や虐待予防に果たす役割、利用者の支援に必要な視点などを議論する。

このほど市民プラザで開かれた運営委員会の会合では、県や市、市民団体の担当者が分科会の内容などを検討。NPO法人子育てひろば全国連絡協議会（横浜市）の奥山千鶴子理事長は「地域で子育てを支援する態勢をつくるため、有意義なセミナーにしたい」と話した。

11月開催　参加者を募集

参加無料で定員400人。申し込みはインターネット、ファクス、郵送のいずれかで締め切りは10月10日。問い合わせはマミーズ・ネット、025（526）1099。

全国セミナー開催に向け、内容を話し合った運営委員会＝上越市

新潟日報　2012 年 11 月 11 日掲載　↓

上越　子育て 社会全体で

全国セミナー 支援の在り方議論

子育て支援の在り方を一流の場「子育てひろば」の関係者ら延べ約680人が集まる。

初日は、子どもの心の発達について慶応大学病院外来医長の渡辺久子医師が講演し「生まれたての赤ちゃんも他人の意図や雰囲気を見抜く。多くの人にかわいがられると、身体の記憶として一生残る」と強調。社会全体での支え合いを訴えた。

続くシンポで地元のNPO法人マミーズ・ネットの中條美奈子理事長は、子育てひろばの役割について「おもちゃの取り合いなどを通して、親子がお互いさまの精神を身に付ける場になっている」と語った。

11日は六つの分科会で、子育てひろばの地域社会との連携や虐待予防の役割などをテーマに議論する。

子育て支援の現状と課題が話し合われた全国セミナー＝10日、上越市山屋敷町

上越タイムス　2012 年 11 月 17 日掲載　↓

680人が実践交流

上教大で全国セミナー

子育て支援や子育てひろばの在り方などを考える「第十一回全国子育てひろば実践交流セミナー」が十、十一の両日、上越教育大で開かれた。県主催、上越市共催。運営員会とNPO法人マミーズ・ネットが企画運営した。

自治体などが設置する地域の子育て支援拠点（子育てひろば）の職員の資質向上とネットワークの広がり、児童虐待の発生予防を目的に、県内で初実施。二日間で基調講演やシンポジウム、各分科会が行われ、全国から子育てひろばにかかわる六百八十人が集まった。

初日のシンポジウムは日本福祉大子ども発達学部教授の渡辺顕一郎さんをコーディネーターに、厚生労働省少子化対策企画室長の黒田秀郎さんをシンポジストに迎え、子育て家庭の孤立化、女性（母親）に集中する子育ての負担、子どもの社会経験の希薄化を背景に、子育てひろばの今後を考えた＝写真。

慶應義塾大学病院外来医長の渡辺久子さん、マミーズ・ネット理事長の中條美奈子さん、上越市健康福祉部長の野澤朗さん

参加者集計

●都道府県別参加

都道府県	参加者数
北海道	4
青森県	0
岩手県	0
宮城県	1
秋田県	2
山形県	8
福島県	1
茨城県	0
栃木県	3
群馬県	5
埼玉県	7
千葉県	15
東京都	24
神奈川県	14
新潟県	457
富山県	5
石川県	1
福井県	2
山梨県	6
長野県	62
岐阜県	5
静岡県	7
愛知県	5
三重県	0

都道府県	参加者数
滋賀県	0
京都府	1
大阪府	17
兵庫県	1
奈良県	0
和歌山県	2
鳥取県	0
島根県	0
岡山県	10
広島県	2
山口県	0
徳島県	0
香川県	7
愛媛県	0
高知県	3
福岡県	1
佐賀県	2
長崎県	0
熊本県	2
大分県	2
宮崎県	0
鹿児島県	0
沖縄県	0

計	684人

●日別参加

		参加者数
10日参加		472
11日参加		470
	第1分科会	98
	第2分科会	65
	第3分科会	41
	第4分科会	83
	第5分科会	115
	第6分科会	36
	その他	32
2日間のべ人数		942人

当日キャンセル　34人
当日参加　11人

アンケート結果

・とても心に残る言葉がたくさんありました。行政の現状も知る事もできました。今回参加できて、本当に良かったです。

・子育てひろばの重要性を改めて知らされました。これからも心を広く持つように心がけながら頑張ろうと思います。

・初めて参加。子どもやその親、地域の人たち、全員のために取り組んでいける保育士、支援者を目指し、また地域をより良くしていけるようこれから努力していきたいです。

・保育園現場にいる為、ひろばの現状がよく分からないが、話の内容で現代の子育ての問題点など、共通する部分を多く感じ、勉強になりました。

・多世代・地域の方との関わりが持てるようにしたいと改めて意識することができた。

・支援センターの意義？本当の意味での支援とは？保育園との連携はどうすればうまくいくのか etc…そんな疑問の解決の糸口探しに出席させて頂きました。すべてが解消した訳ではありませんが、皆さんの熱い思い、パワーをもらえたことは大変大きな収穫でした。

・子育て全般の県版のフォーラム（毎年実施）があると、地域の実情に応じた積み重ねができ、有意義だと思う。

・全体を通してとても充実した会でした。保育園に勤めていますが、勉強になることが多く、ひろばで活動したくなりました。

・自分自身を見直すきっかけをもらった。これから考えなければいけない課題がみつかった。スタッフ間、利用者間の会話の重要性をあらためて実感した。時代とともに、子育ての環境は変化していくので、その時、その時で考えて学んでいきたい。

・初めての参加。志の高い方ばかりでまだまだ新人ですが、これから自分に何ができるか考えさせられるセミナーでした。日々の保育に意味をもたせ、質の高い保育ができるよう努力していきたいと思いました。

・支援者の立場になり一年たち、まだまだひろば内でしか子育て支援はできないと思っていましたが、地域の中でもできることがあるのではないかと感じました。

・全国のひろばをがんばってやっている方々から、いっぱい力をもらいました。ありがとうございました。

・講師の方々の人選がとても良かったです！渡辺久子先生、汐見先生のお話、とても楽しく学べることが多く、良かったです。

・ひろば事業は単なる居場所運営でなく、親だけの支援でもなく、地域の中の子育て・子育ち支援、社会づくりだということがよくわかりました。今後、ひろば事業のあり方などを検討していく際や、スタッフ＋行政職員向け研修などを企画していく際に大変参考になります。また、行政として、虐待防止担当や保育園・幼稚園・所管部署など行政間の連携を進めていくべきと感じました。

・子育て支援のプロとして何が求められていて、私が何か役に立っているか、志などを見失いがちですが、セミナーなどで再確認できると思いました。仕事へのプライドが取り戻せました。

・今回で４回目の参加になりますが、今回は今までと違った、これからのことを考えていくことができました。

・これまでなんとなくNPOで関わってきたが、今回、分科会のみの参加でしたが、とてもいい機会を与えていただきました。

・内容は参考になり、とてもよかった。会場がわかりづらかったが、スタッフの方の丁寧な案内で安心できた。

・渡辺久子先生のお話が強烈に印象に残りました。分科会の内容も、身近な問題ととらえていたので、先生方の話がとても参考になりました。やっぱり実践者の方と同じ場で交流することで刺激となり、ひろばに元気を伝えたいと思う。

・たいへんわかりやすかったです。ひろばの歴史から、子どもにとって必要な場についてまで、さまざまなことを学びました。先は長いですが、まずは地域の力をつなげていくことを目標にします。本当にありがとうございました。

・どれも時間が足りないように思いました。これからの10年、と考えると「ん～」と思ってしまう。１年１年を考えて、進んでいきたいです。

・参加者同士の話し合いや情報交換の場を設けていただければ、もっと満足度が上がったと感じました。

・自分と同じような思いをして、行動をして、ひろばをつくってきたスタッフの方々が全国にいらっしゃることを改めて感じるこのセミナー、勇気がでました。気づきや学びも沢山ありました。ありがとうございました。

・ひろばの役割に、DV防止、DV相談への連携も入ってくるのでは～と感じました。（母親の自尊心・存在の尊重）

・地域社会と協働で、ひろば活動の展開をしていくことの大切さをあらためて感じました。

・セミナーは小きざみになってしまうのが残念です。もっと大まかに分けて、たっぷり話をききたいです。色々なひろばの意見交換もあったら良いと思いました。

・スタッフの皆様、大変お疲れ様でした。たくさんの学びがあり、明日からの「ひろば」運営に生かせることばかりだったと思います。毎年参加していますが、いつももっと聞きたかった、時間が足りないと感じています。来年は３日間開催を希望します。

・初めての参加でしたが、今まで地域子育て支援センターを続けて来た実績の良い意味で確認でき、発見、反省、そしてこれから楽しく続けて行けたらと、心強く思うことができました。心の通う研修だったと思います。

・２日目だけの参加になりましたが、実践発表を聞くことができ、参考になりました。子育て支援、難しいです。

・セミナーでの学びを先達に活動を行っております。参加するとガンバラなきゃという気持ちが熱く湧いてくるのがうれしい！交流会のごちそう、おいしかったです。

・とても学びの多い２日間でした。10 年のふり返り、そしてこれからをしっかりと考えることができました。帰ってスタッフと話しあい、自分たちに何ができるかを考えたいと思いました。お世話になりました。

・子育てひろばとは違う職場にいるが、とても参考になった。子育て支援者としての専門性を今後高めていかなければいけないと感じた。課題はたくさんあると思いますが、頑張ってほしい。

・テーマのように、これからの 10 年地域を巻き込んで、どのようなひろばをつくっていくのか考えるポイントを、ヒントをいただいた。

・初めての参加でした。盛り沢山な2日間でした。子育て支援もまだ関わり始めたばかりだけど、どんどん深みにはまっていきたいです。

・セミナー～交流会まで、とても心遣い、気遣いが行き渡っており、とても楽しいセミナーでした。

・このような大きなセミナーがあることを初めて知りました。保育園とは少し違った“ひろば”の話を聞くことができて良かったです。また支援は大きなことばかりではなく、小さなことから始めていこうと感じました。参加できて本当に良かったです。ありがとうございました。地元での開催だったので、とても来やすかったです。

・全国の多種多様な方々と交流しながら、いろいろなお話を聞かせていただき、今後子育て支援に少しでも関わる者として、とても参考になりました。ありがとうございました。

・０～３歳、本当にパワーのある時期、関わっていてそう思います。心地よいセンターを目指し、職員と話し、一歩一歩進んでいきたいです。ありがとうございました。次回も参加したい。

・参加者の多い研修に驚きました。これからの10年、20 年、30 年?!…続きますように。ありがとうございました。キーワード、ヒントいっぱいおみやげがありました!!

セミナーを終えて　～運営委員より～

ＮＰＯ法人マミーズ・ネット
中條美奈子

全国で親子のためにと実践や研究を続けている大勢の皆さんにお出でいただけたことを大変感謝いたしております。地域子育て支援事業は、まだ歴史の浅い事業です。０歳から３歳くらいの子どもを育てている人たちの居場所がほしいという思いが、各地でひろばという形になり制度として育っている過程に、今、私たちは立ち会っているのでしょう。10 年後に新しく親となった人たちが、「昔はひろばがなかったなんて信じられない！どうやって子育てしていたのだろう」などと考えてくれるようだといいな。そんなことを考えながらこの準備をしたこのセミナーが、「ひろば」の活動がさらに豊かになっていくきっかけになれたらうれしいです。

NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会
奥山千鶴子

新潟県主催、会場は上越市となったことから、たいへん話題になったトキの子育て、そして「子育てするなら上越市」の心意気をお伝えする環境は整ったと感じた次第です。トキもヒトの子どもも地域の環境に大きく影響を受けます。まさに地域子育て支援拠点を通じて、子どもたちの根っこを育む地域づくりが求められます。渡辺久子先生がおっしゃった「心根のやさしいおばあちゃんがいっぱいいる地域は生き延びる」。そしてどんなに困難を抱えたご家庭であっても、組んだ相手である支援者によってプラスの力が引き出されるよう、私たち自身一層の学びが必要だと気を引き締めましたね。

最後の全体会では、汐見先生から実践者に向けてより実践交流の場が必要であるとのご示唆もいただきました。新たな１０年にむけて、やるべきことが見えた節目の全国セミナーであったと感謝しています。

ＮＰＯ法人ゆめきゃんぱす
児玉久美子

春、お隣の市で活躍されているマミーズ・ネットさんから電話がなった。「全国セミナーを上越でするので、運営委員になってください。」簡単なお手伝いなら、と思って参加した運営委員会。あれよ、あれよと言う間に分科会担当、その上、事例発表もすることになった。頑張っている人たちがそばにいると、自然に引き上げられていく。そんな事を感じながら・・・あっという間の準備期間でした。全国セミナーを終えてスキルアップになったり、「自分だけそう思っているのではない！」「みんな同じ悩みを持っている」と、支援者自身も安心したり元気づけられたりしたのではないでしょうか。関わって下さったすべての皆様に感謝します。

ＮＰＯ法人ヒューマンエイド 22
椎谷照美

全国セミナー終了後、参加した方から「職員研修として参加した。交流会で全国の方と出会い美味しいお酒もありとても楽しめた。各分科会に職員が参加したことで、他の分科会の様子も聞くことができ学び合えた。今後もこのような会に参加しようと思うきっかけをもらった」という感想や「セミナーを盛り上げようとするスタッフの意気込みが伝わった」という嬉しい声が届きました。定員を上回る参加者数の中、２日間おおいに盛り上がった新潟での全国セミナーに、運営委員として、参加できたことをとても嬉しく感謝しております。ありがとうございました。

たちばな保育園
橘　潤浩

全国規模の研修会がこの上越市で開催されるということで大変緊張した運営委員の一員を努めさせていただき体得することが多くありました。

私の担当は当日の夜行われる懇親会でしたが、会場担当者との打合せで、地元の献立、地酒などの内容を引き出せたのも、運営委員長をはじめ、事務局皆様の熱意の賜だったかと実感しています。

今回、研修会に係わらせていただいたことで、人口の多少によらず、子育て支援事業は必要とされているということを再認識することができ、それを踏まえ今後の法人運営に向き合っていく決意を、新たにさせていただくことができた研修会となりました。

ありがとうございました。

NPO 法人多世代交流館になニーナ
佐竹直子

多くの方のご協力のもと、美しい紅葉に抱かれた上越市で全国セミナーを開催できましたこと、心より感謝申し上げます。盛り沢山な講師陣、スケジュール、余興？でしたが、新潟県民おもてなしの表れと、プラス評価していただけると幸いです。全国から多くの方にお集まりいただき、お迎えする側として、様々な問題点をクリアーし、素晴らしかった記憶のほうが残るセミナーにしてしまうという、運営委員をはじめ関係団体のマンパワーも素晴しい！と感じました。こんな仲間が県内にいることが、私の誇りでもあり、財産にもなりました。これを機に、またトキのように羽ばたいていくであろう新潟の子育てネットワークにワクワクがいっぱいです。

上越教育大学
杉浦英樹

地域コミュニティの再生が求められて久しく、それは暮らしの様々な領域で試みられていますが、子育ての共同の場としての「ひろば」もその一つなのかもしれません。お互い様どうしの関係で支え合うかたちをどのようにつくるか、コーディネートする者にこれから何が必要なのか―私たちの分科会はそれを話し合うはずが、時間不足でした。すまなく感じています。

上越会場はアクセスが厄介な場所なので、正直、セミナーが見合うものになるか少し心配でした。でも、アンケートの回答をみて参加者の皆さんほぼ満足のご様子、ほっとしました。何よりも運営の原動力となった火事場のママさんパワー？はホント感動もので、これが最終的に皆さんに伝わったとみています。

長野県短期大学
金山美和子

どんなに情報通信技術が発達しても、実際にその場所に行き体験すること、直接会って話すことで得られるものの計り知れない大きさを、セミナーを通して実感しました。運営委員の皆さんとは１年近くの間準備を進めるなかで信頼関係が深まり、地元新潟の子育てを支えるための大切なつながりが生まれました。セミナーの２日間では、沢山の刺激を受け視野が広がり、新たな課題がみつかるとともに今後取り組みたいことが明確になりました。

全国セミナーにお集まりいただいた皆様の子育て支援の「とき」が実り豊かなものになり、その実りが親子を支える希望の種となって、全国各地に芽吹くことを願っています。

上越市こども課
白石　聡

辺境の地？新潟県上越市での全国セミナー、大勢の方々からご参加いただき大変ありがとうございました。

テーマの「大きく育て、ひろばの新たな１０年」。これからのひろばが皆さまの中でイメージできましたでしょうか。

セミナーでは、たくさんの方々と交流を深めることができました。まさに「一期一会」、出会いとつながりという大きな財産を得た気持ちでいっぱいです。このセミナーで得たものを次はそれぞれ現場のひろばへつなげ、子育てひろばの新たな展開ができればと強く感じました。

参加者の皆さま、セミナーを一緒に盛り上げてくださった関係者、また運営委員の皆さまに心より感謝いたします。

第１１回全国子育てひろば実践交流セミナーｉｎにいがた運営委員会名簿

運営委員長	中條美奈子	NPO 法人マミーズ・ネット　理事長
副運営委員長	奥山千鶴子	ＮＰＯ法人子育てひろば全国連絡協議会　理事長
運営委員	佐竹直子	NPO 法人 多世代交流館になニーナ　代表理事
	椎谷照美	NPO 法人ヒューマンエイド２２　代表
	児玉久美子	NPO 法人ゆめきゃんぱす　副代表理事
	橘　潤浩	社会福祉法人江恵会たちばな保育園　施設長
	杉浦英樹	上越教育大学　准教授
	金山美和子	長野県短期大学　専任講師
	白石　聡	上越市こども課　企画係長

終わりに

第 11 回全国子育てひろば実践交流セミナーin にいがた
運営委員長　中條美奈子

2012 年春に初めての運営委員会が開催されテーマを決めていたころ、放鳥されたトキが初めて子育てする様子が報道され、日本中が温かく見守っていました。この温かさで地域が子育てをする親子を見守ってほしいね、地域で支えないと子育て親子が絶滅危惧種になりかねない、などとわいわい議論しました。そして、テーマ内の「とき」には、時と朱鷺を掛けることになりました。「子育てのときを実り豊かに〜大きく育て　ひろばの新たな 10 年〜」というテーマは、稲刈りが終わり海や山の実りを存分に楽しめる新潟の秋に、全国で子育て支援をしている人たちが集い、実践や交流を深めて豊かな実りを各地に持ち帰っていただきたいという願いも込めて決定しました。新潟らしさがでていいね！と運営委員一同納得でした。

参加者アンケートをみると、私たちの願いは叶ったようで、内容に満足したという回答やお褒めの言葉をいただきほっとしました。子育て当事者のニーズから生まれてこの 10 年間で全国に育ったひろばの、次の方向性を考える場としていただけたようです。

もう一つ、晴れやかな青空の下、紅葉の妙高山の山並みを見ていただきたいとずっと念じていたのですが、こちらは残念ながらかなわず、新潟の初冬らしい荒れた天候を体験していただくことになってしまいました。

両日述べの参加者 942 人。北海道や九州からもご参加いただきました。昨年の大阪の会場はきれいで快適なホテルでしたが、今回は最寄駅からも遠い大学が会場です。なるべくご不便を掛けないように準備をしました。上越教育大学からもセミナーの意義をご理解いただき大変よく協力していただきました。それでも皆様にはご迷惑をおかけしたことと思います。

新潟県は縦に長い県です。広く県内各地域から参加いただけたこともうれしい成果でした。この運営委員会をネットワークとして残していくことも決まりましたので、今後も新潟県内の交流や研修の機会を設けることができればと思っております。

事務局としてこのような大きなセミナーを運営するのは初めてのことでしたので、試行錯誤の繰り返し。学んだことは本当に多く、今後の活動の財産になると思っております。今は「また全国セミナーやるとしたら」などと笑って冗談が言えるようになりましたが、ずっと、焦りと不安でいっぱいでした。そんな私たちに様々な方が適切なアドバイスや温かな励ましをくださいました。見守り育てられるトキは私たちだったかもしれません。周囲の温かい見守りとちょっとした手助けで成長できる、交流やネットワークの力で問題は解決できる、ということをこのセミナーの運営の中で再確認いたしました。「ひろば」の役割そのものですね。皆様、本当にありがとうございました。これからも、よろしくお願いいたします。